

管 弦 楽 団

プロローグ

日本の洋楽の歴史は1853年、アメリカのペリーが来航し、軍楽隊の演奏を聞かせた時から始まる。以来文明開化の中で洋楽も少しずつとり入れられていったが、それが人々の耳になじむには長い年月を要した。日本で管弦楽が定期的に演奏されるようになったのは明治も35年を過ぎてからで、東京音楽学校（芸大の前身）が春秋2回の演奏会を行ない、常連の聴衆を集めていた。

一方東京大学は明治10年の創立以来「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授スル」（帝国大学令）ことを目的として多くの人材を国家の中核に送りこんでいた。そして大学において西洋の學術を学んだ学生たちがやがてその背景にある西洋の文化に目をむけるようになったのは当然のなりゆきだった。今日でも音楽会の聴衆は学生が多いが、当時の東京音楽学校の演奏会の聴衆は、ほとんどが学生だったという。聴くだけでは満足せず自分でヴァイオリンを弾く学生も明治末にはかなりの数にのぼり、中でも帝大在学中だった田辺尚雄氏（明40年卒、現武蔵野音大教授）や颯田琴次氏（音楽部創立の功労者、後部長に就任）は東京音楽学校の管弦楽に加わって、ヴァイオリンを弾いていた。同好の士はこうして増えてゆき、やがて各地の大学に、プロのオーケストラ設立に先がけて、学生による管弦楽団が作られていったのだった。

I. 創立のころ

§ 1. 創立前夜

大正6年のこと、今の農学部前の東京帝国大学学生基督教青年会館に集まって楽器を奏するグループがあった。当時帝大では学内での「歌舞音曲」を禁じられていたため、同好の士は学外で私的に集まって合奏するより他なかった。妙な音—妙音—を出すグループというわけで「メオン・グルッペ」と自称し、神田襄太郎氏（大9卒）の努力によって創立し、指揮者に作曲家弘田龍太郎氏（「浜千鳥」の作曲者として有名）をむかえてほかにメンバーも増え、モーツァルトのジュピター交響曲などを手がけるまでになった。メンバーには多忠亮氏（Vn）、矢追秀武氏（Vn）、岸偉一氏（Ob）、近衛秀麿氏（Va）、増沢健美氏（Fl）などがいて、京都、神戸、朝鮮にまで旅行して京城公会堂などで演奏したこともあ

った。（大正9年夏と推定される）このメオン・グルッペは大正9年、東大音楽部の創立とともに発展的に解散した。

一方、向ヶ丘の旧制第一高等学校（一高）にも弘田龍太郎氏の指揮する小オーケストラが同じころ作られ、前記岸偉一氏などが中心となっていた。編成は弦が10余人、木管3、4人、プラス2、3人、大太鼓、小太鼓、といった程度で、かなりのメンバーはメオン・グルッペと共通しており、ともに東大音楽部設立の土壌をつくったといえよう。なおこの一高のオーケストラは一名「向陵フィルハーモニー」と称し（内海誓一郎氏談）、やがて一高が駒場に移り、戦後東大教養学部となるまで続いていたと思われる。

ほかに東京アマチュア・オーケストラ・ソサエティという団体があって学習院関係の人が中心となっており、これに矢追氏ら東大関係者も加わっていた。指揮はのちに東大音楽部の初代指揮者となった瀬戸口藤吉氏で、近衛秀麿氏もこのオーケストラで指揮を練習していた。

以上、三つの団体が東大音楽部の前身となったのであり、これらに参加していた人たちの間で東大に管弦楽団を作ろうという動きが高まっていったのだった。

§ 2. 音楽部の創立

大正8年から9年にかけて音楽部設立の気運はいよいよ高まり、学士会館や山上御殿で何回かの会合が行なわれた。中心となって動いたのは教官では渡辺鏡蔵教授、田丸卓郎教授、颯田琴次教授でであり、学生では岸偉一氏、遠藤宏氏、塚本越夫氏、矢追秀武氏らで、渡辺氏が評議会との交渉にあたり、田丸氏が部長となることになった。当時東大には「学内で歌舞音曲を禁ず」という学則があってこれを改正してもらうことが最初の課題だった。そこで総長が古在由直氏に交代したのを機に遠藤宏氏が各国の大学における音楽の状況を調べ、矢追氏、岸氏らが先輩の応援を受けつつ折衝をした結果、1920年（大正9）秋になって学則の「歌舞音曲」の項は削られ、音楽部は正式に発足した。そして同年11月に学友会に加入、「東京帝国大学学友会音楽部」として年200円の予算が出るようになった。

同年12月頃にはドイツへ楽器と楽譜を注文した。このための資金は主として渡辺教授、颯田教授が奔走して各

方面から集めた寄付によるもので、当時は第一次世界大戦後の好景気の折で意外に多く集まり、結局当時の金で2000円をインフレになやむドイツへ送ったのだった。

指揮者には、当時上野の音楽学校のオーケストラに関係していた颯田教授の世話で海軍軍楽隊の瀬戸口藤吉氏をむかえることとなった。瀬戸口氏は当時53才、何よりもまず「軍艦マーチ」の作曲者として有名であり、長らく各地の軍楽隊長をつとめていた人で「元気潑刺、然も古武士的風格をそなえ、東大音楽部としては頗る好箇の統卒者」（颯田氏による）だったという。瀬戸口氏には大学から教導費として月50円ほどが出されることになった。またコンサート・マスターには経済学部の講師ペルリーナ氏をむかえた。

結局大正9年中には楽器もなく何もできずに終わり、翌大正10年（1921）には学年末になっても予算を使っていなかったので、当時来日中のピアニスト、ウイリー・バルダス氏のリサイタルを主催した。場所は八角講堂、ほかに合唱の教導に決まっていた沢崎定之氏（音楽学校教授、のち「第九」の日本初演の独唱者の一人）の独唱がはいった。これが第1回演奏会として数えられることになる。

§ 3. 最初の演奏会

大正10年の夏前によくやく楽器がドイツから到着した。木管・金管ひとそろい、ティンパニー対、それにチェロなどで、最初に荷を解いてまばゆいばかりの楽器が姿を見せた時の感激は非常に大きなものだった。（これらの楽器のうちティンパニとチェロは現在でも使用しており、ティンパニには「大正ナベ」という愛称がつけられている。またバス・トロンボーンは同型のものがほかには芸大にしかなく、芸大のそれは資料館行きになっている。）中でもコントラ・ファゴットはそれまで日本には全くなかったもので、最初の奏者となった中根不羈雄氏（大12卒）は解説書をたよりに苦闘した。（注1）楽器とともに主にブライトコプフ版のオーケストラや室内楽譜が多数到着し、積重ねると1mにもなった。これに続いて、ま新しいスタンウェイのグランドピアノが高輪の岩崎家から寄贈され、練習場にあてられた医学部学生食堂の奥にすえられた。

こうして管弦楽団の物質的基盤もようやく整って部員たちは瀬戸口氏の指揮のもと練習を重ね、大正10年12月には第2回演奏会、すなわちオーケストラとしては初めての演奏会が当時の洋楽のメッカ、東京音楽学校の奏楽堂を借用して行なわれた。メンバーは43人、うち管楽器の一部やコントラバスには陸軍戸山学校や海軍軍楽隊の

楽手の応援が9名はいり、曲目はロザムンデ序曲、ジュピター、カルメンなど音楽学校の管弦楽団にも劣らぬ正統的なプログラムだった。

半年後の大正11年（1922）6月には神田のYMCAで第3回演奏会を開き、エグモント序曲やハイドンの驚愕などを奏し、合唱も加わった。メンバーは38人、応援は2名となり、東大関係者だけで演奏しようという理想をかかげて応援を減らすべく努力していった。

つづいて9月には有志20名が近衛秀麿氏を指揮者として東北・北海道に遠征し、「管絃楽大演奏会」を催したりしている。

当時の音楽界

当時は普通の意味でのプロのオーケストラはなく、管弦楽を演奏する団体は東京では陸軍・海軍軍楽隊、宮内庁雅楽部、それに東京音楽学校のみだった。陸軍軍楽隊のは明治42年ごろから音楽学校の講師のもとで弦楽器を学んで管弦楽演奏を行っていたものであり、音楽学校は明治31年から春秋2回の演奏を行ない、当時我国最高の演奏を聞かせていた。（ただし管楽器は宮内庁や軍楽隊の応援に頼っていた。）明治末以降学生の音楽団体が続々と結成されていった。その最初は慶応のワグネル・ソサエティ（明治34年創立、管弦楽は42年から）であり、これに九州大学フィルハーモニー・オーケストラ（明治43年）、神戸大学、早稲田、京都大学、東大、北大が続いた。そしてプロのオーケストラは大正15年創立の新京響楽団（N響の前身）が初めてであり、それまでに洋楽を定着させるための役割の一端をこれらのアマチュア・オーケストラが果たしたといえよう。

§ 4. ベートーヴェン祭

学生が最も大きな共感を抱き、最も好んで演奏した作曲家といえばまずベートーベンがあげられよう。ベートーベンの劇的な音楽と豊かな人間性が多くの人に感銘を与えたのは昔も今も変わりはない。ただちがうのは大正期の人々はベートーベンに限らず音楽に接する機会がきわめて少なかったことである。当時ラジオはまだなく、レコードは輸入盤で高価な上に曲目も豊富ではなく、針音の間から聞こえてくる音は今日のLPとは比べものにならないほど貧弱なものだった。そこで音楽の好きな学生は早く名曲を聴きたい、知りたいという願望にかられるとそれはただちに「やってみよう」ということになるわけだった。オーケストラをはじめ1年余りをすぎてオーケストラの魅力にとりつかれた人たちがオール・ベートーベンプロをやらうと思ったのもきわめて当然

のなりゆきだった。評論家吉田秀和氏は「現代に生きるベートーベン」という小論の中で東大音楽部のことについて次のように述べている。

戦前もはるか昔、「良家の男子」が音楽家になるなど考えられなかった当時、東京にもまだ定期的な交響楽団の活動が確立してなかったころ、すでに東京大学には学生を中心とした管弦楽団があって、ベートーベンの交響曲の幾つかの日本初演を彼らの手で行っていた。大学生の音楽運動は18世紀ドイツでもあったけれども、歴史も文化的風土も全く違う日本で同じようなことがあり得たのは、やはり、ベートーベンの音楽をやるためであればこそだったろう。(朝日新聞より)

「ベートーベン祭」と名づけられた第4回の演奏会は、大正11年(1922)12月に東京音楽学校奏楽堂で2日間にわたり有料で行なわれた。曲目は命名式序曲、第4交響曲、ヴァイオリン協奏曲第1楽章などで、ヴァイオリン協奏曲を除いては合唱の曲を含めすべてが本邦初演であった。(ヴァイオリン協奏曲は2回目)ヴァイオリン独奏は音楽学校の講師のグスタフ・クローン氏で、同校オーケストラの指揮者でもあった氏は管弦楽の奏法についてもいろいろ助言をしてくれた。練習は10月から大体15回にわたって行なわれ、ヴァイオリン協奏曲など全員がスコアを持って研究したという。そのほかこの年夏には有志が御殿場で合宿して練習にはげんだ。

演奏会当日は、2円、1円という高い入場料だったにもかかわらず満員の盛況で、出演者は41名、うち応援は6名だった。本番のヴァイオリン協奏曲の演奏の時は、独奏のクローン氏がヨアヒムのカデンツァを奏していて終わり近くの一行為とばしてしまっただが、ティンパニの塚本越夫氏が「ソレツ」とかけ声をかけて全員みごとにはいり、無事に終わるという一幕もあった。この日の収益は上野精養軒で行なわれた祝賀会の費用にあてられたというのも今からでは想像もつかない優雅な話である。このあと12月16日のベートーベンの誕生日には、今はない麻布飯倉の南葵楽堂で同じプログラムによる演奏会をひらき、音楽部の創立に援助を受けた教授たちや各界の名士を招待した。

こうして創立2年あまりを経て音楽部の活動もようやく軌道にのったのはやはり当時人材に恵まれ、さらに時節もよく物質的にも恵まれたことによるものといえよう。そのころの演奏がどの程度のもだったかは今日では知るよしもないが、楽器を持って半年あまりの人々が堂々とベートーベンにとりくんだ努力には敬意を払わざ

るを得ない。そして当時の人々の音楽に対する真摯な態度は後の歴史を通じて脈々と生きつづけてゆくことになる。

演奏会以外には、英国皇太子来学(大正11年4月)に際して東京の各大学からメンバーを集めて合同演奏をしたり、山田耕筰の日本交響楽団(大正14年結成)や東京シンフォニー・オーケストラ(大11年発足)などにエキストラとして加わったりして外部出演も活発だった。

ベートーヴェン祭のあと、指揮者に瀬戸口氏では物足りないからクローン氏を頼もうという話があがったこともあった。誰が瀬戸口氏に断わりに行くか、という所まで話は進んだが結局実現にはいたらなかった。

またベートーベンにとりつかれた人々は「第九」の第1楽章だけでも音にしよう、というわけで総譜からパート譜を写して、練習の始まる前に岸俣一氏のタクトで演奏しようとしたこともあったが、30小節ほどやったところで瀬戸口氏が登場して中止させられた。第九が日本初演される前の話である。(注2)

§ 5. 京大との合同演奏会

ベートーヴェン祭を終えて一段落したわけだが、このあと瀬戸口氏が辞任を申し出たため、後任の指揮者さがしに委員は奔走し、弘田龍太郎氏や信時潔氏と交渉したが不成立に終わり、結局塚本越夫氏と遠藤宏氏が指揮にあたるようになった。

大正12年(1923)9月1日の関東大震災は東大にも多くの被害を出し、教室のほとんどが使用不能になった。12月の第6回演奏会はバラックのような教室で塚本・遠藤両氏の指揮で行なわれた。(注3)

大正13年(1924)になると東京・京都の両帝大は秋にスポーツ週間として各競技を行なうことになり、音楽部同士の交歓も計画された。8月に京大の代表者が上京してきて遠藤氏や、京大の先輩で東大とも縁の深い深瀬周一氏らと協議した結果、スポーツの最終日に合同演奏会を行うことにした。この年は京都で2日間にわたって行なわれ、指揮は京大の指導にもあたっていた瀬戸口氏だった。この催しは大正15年まで3回行なわれ、場所は2回目東京、3回目が京都、それぞれ遠征した方の奏者がトップ奏者をつとめた。(注4)

II: 戦前・戦中

§ 1. 昭和前期

震災後瀬戸口氏に代わって教導となった遠藤宏氏は以後昭和10年(1936)まで10年以上にわたって指揮をつと

めた。氏は卒業後文学部の大学院で音楽の研究に携わっており、軍楽隊の指揮者だった瀬戸口氏によって基礎固めができたあとは、遠藤氏のような音楽的な意味での専門家が求められていたのだった。

このころの演奏会は年一回、秋に神宮外苑の日本青年館で行なわれ、いつもかなりの盛況だった。入場は無料で、収入源としては学友会の予算しかなかったために年一回の演奏会がせいっぱい、したがって練習も近年のようにいつもスケジュールに追われることもなくのんびりしていた。曲目の決定も遠藤氏にまかされていたために、南葵音楽図書館から珍しいオーケストラ譜を借りてきて次々と変わった曲を演奏した。現在までに東大オーケストラの本邦初演曲は60曲以上にのぼるが、その多くはこの時代のものであり、中には後にも先にも一度しか演奏されなかった曲もあった。

昭和10年、遠藤氏は九州大学の講師や音楽学校の講師をつとめるようになったため、当時旧制一高で物理を教えていた長井維理氏が指揮者になり、以後実に昭和31年まで20年間にわたって音楽部の指導にあたったのだった。11年からは演奏会は1年2回、春と秋に開かれるようになり、そのほかにも放送や録音、奏楽といった本番が増加した。

昭和10年代の前半は繁田裕司（＝三木鶏郎）、栗本東一、安藤晶、柴田南雄ら豊富な人材を得てオーケストラは一つの頂点に達した。音楽部は12年に運動会をはなれて本部直属になり式典の奏楽を行なうようになって学内でも確固たる地位を得、12年夏の世界教育会議の奏楽に際しては新しい管楽器十数本を大学の予算で購入した。部室はこれまでずっと医学部第三食堂のとなりだったが、昭和13年第二食堂3階の現在の部室へ移転した。演奏会でもいろいろ新しい試みがなされ、まず選曲は幹部部

注1) 上野の音楽学校からも借りにきたというので自慢のタネになった。

現在使っているコントラ・ファゴットは昭和41年に買ったものだが、アマチュアでコントラを有するのは今でも東大と九州大のみで、コントラ奏者がしばしばエキストラに出かけるのは昔も今も変わりはない。なお九州大では大正14年にコントラファゴットを入手している。

注2) 第九は大正13年11月、クローン指揮の東京音楽学校管弦楽団により日本初演が行なわれている。

注3) 震災後まもなく有楽町の報知新聞ホールで有志が音楽会を開いた、という記録があるが詳細は明きらかでない。

注4) 戦後昭和29年、30年に再び合同演奏会が行なわれている。

員の合議で決まるようになったし、名称も11年の24回から「定期演奏会」となった。ステージと聴衆が一体となって楽しもうというわけで、Wie Schön ist es!（歌声ひびく野に山に）を聴衆とともに歌ったのは24回定期が最初であり、以後「恒例番外」として戦時中も欠かさず毎回演奏され、今日まで歌いつがれている。（注5）一方これまでの音楽部の歴史をまとめ、OBとの交流を深めようと栗本氏らの手で「部報」が発行されたのもこのころのことである。

こうして音楽部は「古きよき時代」ともいふべき隆盛期にあったわけだが、社会は戦争への道を歩んでいた。

§ 2. 戦争と音楽部

昭和も13年をすぎると外来音楽家は後を絶ち、軍国童謡が現れたりして音楽界にも次第に戦争の影がさしはじめていた。大学においても軍事教練が必須科目になったり、いろいろな筆禍事件が起こるなど情勢がけわしさを加えてゆく中で、音楽部も第28回定演（昭13）から君ケ代をプログラムに加えたり、「傷痍軍人慰問の午後」を開いたりという形で時局への対応をせまられたのだった。それでも昭和17年まではまだ食料もあったし、終日部室に入りびたる部員の姿も見られたが、定期演奏会を年2回日本青年館で開き得たのは17年が最後だった。

昭和18年、米英楽曲が禁止され、演奏家協会では「我々は枢軸国民以外とは舞台を共にせぬ」と声明したりして音楽も戦時色一色になった。前年以来大学の在学年限は6ヶ月短縮されていたがこの年10月には学徒戦時動員体制がしかれ、文科系学生に対する徴兵延期措置が廃されて学生も戦場へ送られることとなった。18年11月、第38回定期は「出陣学徒壮行演奏会」として学内で行なわれた。合唱は日本とドイツの軍歌集、オーケストラは「旧友」と「愛国行進曲」、それにベートーベンの5番というプログラムだった。当時の人々がどのような感慨を胸に「第5」の運命の動機や勝利の歌を聞いたか、また「歌声ひびく野に山に」の明るいメロディを歌ったかは現在からは想像するよしもない。伊藤隆太氏（昭21卒）はその時の思い出を「えもいえぬ不思議な気分を押さけることも出来ず演奏は進んで行った」と書いておられる。

昭和19年にはいるとかなりのメンバーが学徒動員、あるいは勤労奉仕にかり出されて人数は減り、昭和16年以来参加していた五月祭も中止されて室内楽に日々を送る

注5) この曲の管弦楽伴奏は繁田裕司氏によるものであり、現在はさらに早川正昭氏が大編成に書きなおしたものを使用している。現在までのべ130回以上演奏されている。

ていた。部室のそばには配属将校の部屋があって合奏をやっていると文句を言われることもたびたびだった。それでも部員たちは部室に電熱器を持ちこんで飯をたきながら練習し、何とかメンバーをかき集めて11月定期演奏会を開いた。空襲警報のあい間をぬって行なわれたこの39回定期は戦前最後の定演となり、以後10年間定演は中断した。

昭和20年になるともうオーケストラは出来なかった。部員の戦死の報が次々と伝えられていた。空襲が激しくなって創立以来の楽器のうちバスクラリネットとコントラ・ファゴットが焼失してしまった。6月、日響が戦前最後の定期演奏会を行なってから一週間後、オーケストラでは25番教室でささやかな室内楽演奏会を開いた。そして8月一真夏の太陽が照りつける中で終戦の日をむかえた。

III. 戦後の復興

§ 1. 戦後の混乱の中で

ようやく戦争が終わって大学に音楽が戻ってきた。音楽部室からは室内楽や管弦楽、そして混声合唱の楽しい響きが聞こえるようになった。はじめに立直ったのはやはり合唱であり、オーケストラはややおくれをとったがメンバーの復員とともにその活動も軌道にのった。

戦後初の管弦楽演奏は昭和21年(1946)の五月祭、曲はかつて出陣学徒を送ったベートーベンの第5だった。それ以後29年になるまでは定期演奏会はなかったが、五月祭や秋の文化祭に演奏会を開き、世情の安定とともに質量とも成長していった。五月祭では昭和24年(1949)から安田講堂が使えるようになり、23年から27年まで毎年のように東大女子学生の第1期生だった藤田晴子氏の独奏でピアノ協奏曲を演奏した。また23年ごろからは放送や高校の文化祭出演、奏楽、さらには劇の伴奏など臨時の本番がしだいに増加し、プロ的な性格をおびた活動が多かったのも戦後の特殊事情によるものであろう。このためか戦後の曲目は意外と多彩で、指揮にあたった伊藤隆太氏や長井維理氏もかなり苦勞されたという。

こうして戦後の中でオーケストラが復興をなしとげ得たのは、部室と楽器のほとんどが空襲にあわずに残ったという幸運と、長井氏や伊藤氏らのすぐれた指導があったためであり、次の時代の新たな発展へと導かれる。

昭和25年(1950)になると野球の六大学と同じメンバーで六大学音楽連盟が結成され、軽音楽などとともにし

しばしば六大学演奏会を開き、文化放送から放送されたりした。

さらに28年になって六大学交響楽連盟が発足し、12月第1回の演奏会が開かれ、東大からは24人が参加した。この連盟はこの演奏会を行なっただけで消滅してしまっただが、このことは後年結成された全国大学オーケストラ連盟の活動の先がけをなすものであった。

§ 2. 東大駒場管弦楽団

昭和24年(1949)に新制大学が発足して、駒場には旧制一高と旧制東京高校を吸収して東大教養学部が設置された。駒場中寮3番の総勢12人によって駒場管弦楽団はこのころ発足した。新制大学になってもはじめは本郷と駒場の間の連絡はほとんどなく、駒場の学生は本郷の東大オーケストラの存在を知らなかったという。

戦前東大で音楽部と親しい関係にあり、戦後教養学部教授となった小松清氏や化学の助手だった江原望氏、池田正義氏らが部の基礎づくりに活躍した。楽器は一高の管弦楽団から代金を払わぬまま譲りうけ、指揮はやがて伊藤隆太氏、江原望氏、小松教授などが担当した。25年本郷から合流を望まれて断わったあと、同年秋初めての駒場祭には弦楽合奏とベートーベンの第2の2楽章を演奏、満員の盛況だった。メンバーははじめのうちはなかなかそろわず、エキストラや駒場高校からの賛助がはいったし、練習場も適当なところがなく各教室や体育館に椅子と楽器を運びこむのも一苦勞だった。

27年、これまでになく多数の入部があってだいぶオーケストラらしくなり、7月には駒場構内で第5回定期演奏会(それ以前の駒場祭、クリスマスなどの演奏会を数えて5回目の意)を開き、「エグモント序曲」や「なき王女のためのハバース」などを小松教授と井上一美氏の指揮で演奏した。翌年にはさらにメンバーが増え、7月の定期演奏会につづいて初めて東北へ演奏旅行へでかけることになった。これは小松教授と弘前大学の栗原文理学部長の努力で実現したもので、5泊6日の間に6回の演奏会を行なって多くの人々から歓迎を受けた。

§ 3. 本郷と駒場の合併

こうして4年あまり、本郷と駒場では別々の管弦楽団が活動してきたわけだが、昭和28年(1953)に旧制最後の卒業生を送り出し、駒場の教養学部も軌道にのって駒場と本郷がひとつの大学であるという意識が定着するとともに二つのオーケストラの合併の気運が盛りあがった。駒場は在籍2年、つまり毎年半数が交代するわけで落ち着いた活動もできず、楽器や練習も不足だったこと

から合併はやがて部員の受入れるところとなり、29年4月正式に合併して駒場独自の管弦楽団はなくなり、駒場の学生も本郷へ練習に出かけるようになった。この年、コール・アカデミー合唱団も独立の定期演奏会を行なうようになった。

昭和29年(1954)はその後のオーケストラの活動の方向を示す重要な年となった。この年7月、10年のあいだ行なわれなかった定期演奏会が復活し、エロイカやマイスタージンガー前奏曲のほか、同年五月祭で初演された早川正昭氏の「管弦楽のための三章」が演奏された。この年はまた音楽部の創立35周年の年にあたっていたので、太田泉氏らを中心として「音楽部35年史」が編み込まれ、7月の40回定期の日に発行された。

さらに大正年間以来とだえていた京大との合同演奏がこの年29年ぶりに行なわれた。これは29年3月に京大交響楽団の委員三人が上京してきた時に具体化したもので、当初学生音楽団体の全国組織をつくるのが構想として出され、その第一歩として東大と京大間の交流を深めようというわけで合同演奏会が計画されたのだった。こうして開かれたのが同年12月末の合同演奏会(於京都)であり、交歓レセプションも行なわれて交流の実をあげ、30年7月には東京で再開2回目が行なわれた。しかし財政上のことで多くの問題があったためにこの企画はこれで終わった。最初あった学生オーケストラの全国組織の件はこの時は実現しなかったが、昭和39年になって「全国大学オーケストラ連盟」の発足で実を結ぶことになる。

もうひとつ、駒場祭でショスタコーヴィチのオラトリオ「森の歌」を演奏したのもこの年のことだった。合唱は柏葉会や音感合唱団を中心とする総勢200人(400人ともいわれている)の大合唱で、全体としてまとまりはあまりよくなかった。この時伊藤隆太氏のいれちえで作曲者に手紙を出したところ、駒場祭の終わった12月になって激励のメッセージが届き新聞でも話題になった。

翌30年、指揮は長井氏のほか井上一美氏、さらには栗原大治氏などに依頼することも多くなり、曲目もプロコフィエフの「ロメオとジュリエット」や「新世界」などかなりの大曲が登場するようになった。そして31年6月には芸大の山本力氏を指揮者にむかえ、32年から常任指揮者となった。長井氏は結局20年という長い年月、それも戦中戦後の困難な時期にずっとオーケストラの指導にあたってきたわけで、オーケストラでは32年1月に長井氏引退記念の特別演奏会を開催してその功をたたえた。

§ 4. 山本力氏の時代

山本力氏は昭和34年1月まで2年半にわたって指揮を担当し、音楽の専門家として適切な助言・指導をされて以後の発展の基礎をきずいた。

31年にはまたオーケストラの機構改革が行なわれて組織面でも以後のオーケストラのやり方の方向を規定した。これは主に猿山一郎氏や原田三朗氏らが中心となってメンバーの増加にともなう委員の専門化の必要から実行されたもので総務、内務、渉外、楽譜、楽器、会計、インスペクターなどの委員がおかれた。さらに練習第一主義をかかげて練習への出席率向上をはかったこと、部室に無関係の合唱団を追い出したこと、OBの借りていた楽器を取り返したこと、五月祭で室内楽演奏会を開いたこと、などはこのころの人々の功績であった。

32年、再度京大へ遠征しようと交渉したが失敗に終わり、急速に演奏旅行の計画が具体化することとなった。28年の駒場管弦楽団の演奏旅行当時の部員はもうほとんどいなくて全く手さぐりの交渉だった。春休みの初交渉には猿山氏、村井正守氏らがあたり、山形では朝日新聞にいた大口氏(30年卒)や山形大学長の関口勲氏の力をかりて山形での演奏会が本決まりとなり、つづいて東北3都市と札幌での話がまとまった。なにぶん初めてのことで、しかも学生オーケストラで本格的な演奏旅行を行なっているのはほとんどない時代だったから採算の点などで苦労は大きかったが、結局8日間に9回の音楽教室と5回の演奏会を行なうというハード・スケジュールを無事消化し、採算もどうにかとれて一応成功に終わった。演奏旅行はこれ以後毎年行なわれるようになり、オーケストラにとっては冬の定期演奏会とならぶ大きな行事となった。

IV. 早川時代

昭和34年から43年までの10年間はまさに早川時代とよぶにふさわしい。早川氏の豊かな音楽性と明快な指揮、そして学生オーケストラをよく理解した指導は音楽的水準を飛躍的に向上させ、やがてあの訪欧演奏旅行の成功へと導くのである。

§ 1. 早川正昭氏と東大オケ

早川正昭氏は昭和27年東大入学と同時にオーケストラにはいり、入部早々からチェロ、ホルンなど万能奏者として、また指揮、編曲、作曲に大活躍をした。29年には「管弦楽の為の三楽章」が五月祭で初演されて好評を博し、40回定期と京大合演でも演奏した。31年農学部林学科を卒業と同時に東京芸大の作曲科へ入学、作曲と指揮

を本格的に学ぶかたわら、東大オーケストラの演奏会には毎回出演していた。

昭和34年、常任だった山本力氏が島根大学へ赴任することになったため、当時芸大在学中の早川氏が後をついだ。それ以後早川氏は43年7月まで常任指揮者の座にあって、130回以上のステージ、各種奏楽から合宿にいたるまでオーケストラのほとんどすべての活動で指揮をし、熱心に指導にあたった。この間メンバーの増加と技術の向上に伴って曲目の大曲化、難曲化は著しく、45回定期のブラームスの第4交響曲にはじまってチャイコフスキーの第5、シベリウスの第1、「火の鳥」(ストラビンスキー)、ブラームスの第1、幻想、バルトークの「管弦楽の為の協奏曲」、悲愴、などが次々と演奏された。またアマチュアではあまり演奏されないような近代曲、現代曲もしばしば登場してプログラムをゆたかにした。近代曲現代曲をとりあげることは早川氏がアマチュアのオーケストラを育てるひとつの方法であり、また部員の好みや大きくなった編成にも照応するものであった。特に「ティル・オイレンシュピーゲル」を一ヶ月と少しで仕上げた(39年五月祭)ことなどは早川氏ならではのよう。

§ 2. 発展の時代

昭和33年ごろから43年まではだいたい毎年同じようなスケジュールで活動が行なわれ、長期的な計画による活動ができた。すなわち入学式奏楽にはじまり、五月祭、演奏旅行、夏合宿、秋合宿(38年から)、駒場祭、定期演奏会、卒業式奏楽という一連の活動であったが、反面スケジュールに追われ単に例年どおりのことをするだけではないかという批判もあり、後に大きな問題となる。

部員数は34年ごろ一時60人を割ることもあったがその後順調に増えて、36年ごろからは特殊楽器をのぞいてはほとんどエキストラなしで演奏できるようになり、39年の定期演奏会では出演105名、42年定演では129名を数え、学内でも最大のサークルとなった。楽器の面では、36年ごろから演奏旅行で収益があがるようになって大正、あるいは昭和初期の楽器を少しずつ買いかえることができるようになり、さらに40年からは大学の予算がおりてコールアンブレ、ペダル・ティンパニ、コントラ・ファゴットなどの大物の購入も実現した。(このため下倉楽器店には今なおかなりの借金がある。)

演奏旅行は32年以来、毎年夏に行なわれている。年とともに演奏会の数が増加して日数は8日から9日、人数も80人以上というのが、38、39年以降普通になった。また演奏会はほとんどが自主公演になって会場、宿舎の予

約からチケットの売りさばきまですべて部員の手で行なうようになった。しかしそのために各地の東大出身者などに大きな迷惑をかけることが多くなり演奏旅行のあり方は毎年問題になっていた。旅行中はともかく毎日本番があるので時には大変なハプニングがあるとともにまた非常な名演をすることもあり、中でも出雲でのチャイコフスキーの第5(36年)、浜松での魔笛序曲、金沢での幻想交響曲(38年)、宇和島でのティル・オイレンシュピーゲル(39年)などはなかば伝説的な名演とされている。(そういう演奏に限ってテープが残されていないのもおもしろい。)演奏旅行では子供たちにオーケストラを知ってもらおうと、各地で音楽教室を開いている。特にプロのオーケストラが訪れないような場所では非常に喜ばれており、内容的にもプロのおごりな音楽教室よりはよほど充実してきていると思われる。

定期演奏会は毎年1月行なわれ、曲目は年々質量ともに拡大していった。選曲について各人の好みや各パートの利害、編成の都合などがからんでもめるのも毎度のこと、特に47回定期(37年)などベートーベンの第7交響曲とシベリウスの1番とが主張されて決まらず、結局両方演奏することになったということもあった。39年には学生オーケストラとして、初めて東京文化会館へ進出し、幻想交響曲を演奏して満員の聴衆を集めた。

さて昭和39年、オーケストラは創立45年目をむかえ、12月にはOBを集めて記念演奏会とパーティを開き、OBと現役のオーケストラがそれぞれ演奏した。この時刊行されたのが「東大オーケストラ45年史」であり、太田雅夫氏の編集したものだ。つづいて40年1月の第50回定演ではブラームスの第2、ティル・オイレンシュピーゲル、バルトークの管弦楽のための協奏曲というプログラムが組まれた。これも選曲でもめたあげくの妥協の産物だったが、アマチュアの限界を越えたプログラムとしていろいろな意味で注目を集めた。本番ではブラームスの2番は練習不足でかなりボロを出したが、ティルは前年五月祭以来ずっと演奏してきた曲でもあり、最高の出来を示した。(この時の演奏はLPレコードになって残っている。)

部員の増加に伴って出番のない一年生(用があると手紙で連絡が行くので「手紙部員」とよばれた)がオケに親めるように、また一年同士の親睦の機会を確保するために駒場の教養学部で「Bオーケストラ」の練習をするようになったのは40年4月のことだった。これは主に2年生が運営し、学生が指揮して4月から7月まで練習するもので以後毎年行なわれてある程度の成果をあげているが、一方本郷と両方出席する部員の過剰負担や

一年生の間での技術的隔差などの問題があって現在も解決されていない。

ともあれ、昭和29年の本郷・駒場の合併以来オーケストラはあたかも日本人の経済生活の安定と呼応するように、早川氏の指揮を原動力として質量ともに大きな発展をとげ、41年の訪欧演奏旅行というひとつのピークへむかって歩んでいたのである。

§ 3. 他大学との交流

ここで他大学との交流のことについて若干ふれておきたい。

すでに述べたように昭和29、30年の京大との合同演奏会の時に学生オーケストラの全国組織の構想はあったのだが、その時は機熟さずして成立しなかった。その後10年の間に学生オーケストラの数もおよそ2倍となり、各大学交流の機会が望まれるようになっていた。39年5月、名古屋大学交響楽団の代表3名が東大を訪れて連盟設立の希望を伝え、東大に活動の中心になってもらいたいとの申入れがあってオーケストラ連盟は具体的な構想となった。名大で連盟を提唱するきっかけになったのは名大チェロ族の酒のみ話だったという。その後京大、北大との連絡、都内十数校を集めての会議を経て、8月駒場の同窓会館に全国から13校30人の代表を集めて合宿を行ない、規約や活動方針を討議したすえ「全国大学オーケストラ連盟」（略称オケ連）が発足した。事務局は東大におかれ、初代の事務局長には太田雅夫氏が就任した。以来毎年夏の合宿や理事会、ブロックごとの合同演奏会など活発な活動を続けており、加盟校も80校にのぼって大学間の交流にとってかけがえのない機関となっている。関東ブロックでは合同演奏会もたびたび行なわれており、前回はブルックナーの4番など大曲をとりあげた。

そのほかの大学間の交流の場としてはジュネス（青少年音楽日本連合）がある。これはパリに本部をおく組織の下部機関として設立されたものでNHKの人の手で運営され、毎年の青少年音楽祭では各大学選抜メンバーによるオーケストラをつくって出演し、その演奏はNHKから放送される。昭和39年の第5回音楽祭の時は例年と異って各大学ごとに一曲ずつ演奏したが、この時東大は難曲「ティル・オイレンシュピーゲル」でプログラムの最後をかざり好評だった。

V. 訪欧演奏旅行

昭和40年（1965年）4月、末広恭雄教授のあとをうけ

て経済学部の松田智雄教授が音楽部長に就任した。そしてその年9月、学会のため西ドイツにおもむいた松田教授は、チュービンゲン大学学生事業局長ズィーベツト氏から、同大学学生室内楽団との交歓演奏の申込みを受けた。オーケストラの50年の中でも最大の活動であり、オーケストラをひとつのピークにまで至らしめた訪欧演奏旅行はこの時端を発したのだった。

§ 1. 訪欧決定まで

オーケストラの部員がはじめてチュービンゲン大学からの申入れの件を知ったのは40年10月有志数名が松田教授宅を訪問した時のことだった。その時の話では41年3月にチュービンゲン大学の室内楽団が来訪するので面倒を見てほしい、また答礼に東大オーケストラがドイツに行くという話もあるが資金的に困難だ、ということではじめは訪独など夢物語のような話であった。その後チュービンゲンの来日が1年延びて42年3月になり、東大の訪独が41年秋に可能ではないかという見通しができたため、資金的な面やオーケストラのスケジュールなどの点について予備調査を開始した。この予備調査では資金としては約3000万円かかること、その多くは財界はじめ各方面からの寄付にたよらねばならないこと、それについては松田教授から各界へはたらきかければ何とかなると推測されること、などが明らかにされた。

41年1月の第51回定期演奏会のあと訪独調査委員会を部内に設置してさらに本格的な調査にあたった。部員の間でもさまざまな討論が行なわれ、チュービンゲン大学との交歓・日独親善という大義名分以外にオーケストラにとって、各人にとって訪独の積極的意義は何か、日本のアマチュア・オケとして一応の線までは来ていた東大オーケストラが音楽の本場でどう受とめられるか、このような大きな事業はサークル活動の枠を越えているのではないか、個人負担（8万円と予定されていた）に問題はないか、ドイツへ行かれない人が必ず出るがその人々をどう扱うか、訪独後のオーケストラはどうなるのか……など問題は尽きなかった。

2月の試験中も準備交渉は続けられ、部員には討論資料やアンケートがたびたび配られた。そして3月24日と27日、卒業式演奏の練習のあと訪独につき最終決定を下すための部員総会が開かれ、上述の問題点を中心に両日あわせて10時間以上に及ぶ討論が行なわれた末、27日の夜10時半になって採決の結果、ドイツ演奏旅行をオーケストラの活動として行なうことが正式に決定した。これに基づいて17名の実行委員が選出され、訪独実行委員長には39年度総務をつとめ、45年史の編集、オケ連の設立

などその実行力には定評のある太田雅夫氏（当時法学部4年）が就任した。

これ以後オーケストラはドイツ行きという一大目標にむかって巨大な歩みを続けていった。

§ 2. 練習と準備の6ヶ月

毎年の国内演奏旅行の時は準備・交渉いっさいを部員が担当していたが、訪独ともなると部員と松田教授の力だけではどうにもならず、特別に旅行本部（本部長は大越伸農学部教授）が設置され、一方募金活動のために後援会（会長・元東大総長茅誠司氏）が組織され、各方面に計画書・募金趣意書を配る仕事が始まった。4月19日には学部長会議で東京大学が正式に派遣するという形をとることが承認され、ドイツではドイツ政府内務省、チュービンゲン大学、ドイツ学術交換奉仕会（DAAD）が受入れを担当することになった。またチャーター機の残りの座席をうめるための同行旅行団の編成や航空代理店の依頼などが6月までに行なわれた。

この間オーケストラは例年どおりの活動を続けた。まず五月祭はレオノーレ序曲、イタリア交響曲、ドン・ファンというプログラムで行なわれ、「ティル・オイレンシュピーゲル」以来再びR・シュトラウスがとりあげられた。特にドン・ファンは大変な難曲で、各パートとも必死で分奏を重ねた。この年入部した41年度生が少なくなっただけはこのドン・ファンの難かしきのせいだともいえる。つづいて7月の演奏旅行では上記三曲に「新世界」を加えて正味2時間にも及ぶ曲目を演奏したが、秋の大事業を前にしてやや落ち着かず、しかも超難曲ぞろいだったためにあまり評判はよくなかった。特に大阪の新世界の時はスケルツォでオーボエがはいりそこなってメロディがなくなって弦のきざみだけになり、それもだんだんわからなくなってあわや止まるかと思われる頃りかえしのところでティンパニが必死にはいってようやく演奏がつづけられるという一幕もあった。以上の練習のあい間をぬってドイツ語会話の講習会や日独文化についての読書会も行なわれた。また訪独実行委員会では「頭毛狂歩兄」という奇妙な名（委員の頭文字をつづりあわせて漢字にしたもの）の新聞を発行して本部報告、交渉経過、各種手続などを部員に知らせた。訪独に参加するメンバーは予算の点から100人を越えることはできなかったもので、これも6月には決定して新聞紙上に一挙に発表された。

一方松田教授は7月初旬学会出席を兼ねてオーケストラ訪独の交渉に出発したが、この過程でドイツ側から当初東大で用意したブラームスの第4交響曲をふくむプロ

グラムは重厚すぎて不適當なので変更してほしいという申入れがあった。テレックスや国際電話で松田教授とたびたび相談した結果、五月祭の三曲と前回の定期演奏会で初演された早川正昭氏の木琴協奏曲、モーツァルトのヴァイオリン、ヴィオラのための協奏交響曲、ディヴェルティメント17番の中から4種のプログラムで演奏することとした。またオーストリアのグラーツとウィーンで演奏することも決定し訪独の名称は「訪欧」となった。この間後援会を中心とする募金活動は積極的に続けられていたが、オーケストラでも10月に記念特別演奏会を開くことにして7月初めには1500円と1000円という値段で売り出した。これはもちろん前例のない高額なものだったが、半分は寄付行為であることを了承してもらって売ったもので、200万円以上の収益をあげた。

8月15日から妙高高原で2週間にわたる合宿がはじまった。トレーナーとしてNHK交響楽団やヴィヴァルディ合奏団の人を招いて徹底的な練習を行ない、大きな成果をあげた。反面目標が練習一本にしぼられたことからいろいろな問題がもちあがり、たびたび委員会や総会が開かれ、実行委員会では特別声明を出すなどかなり異常な雰囲気もあったことは確かである。つづいて9月、10月は例年では試験のために練習を休むがこの年は週一回土曜日に練習を続けることにした。このころになると旅行団も含めて百数十人もの渡航手続やヨーロッパとの連絡、公文書の作成など本部の事務は多忙を極め、あわただしい日々が続いた。

10月21日、日比谷公会堂で訪欧記念特別演奏会を開いた。高い入場料にもかかわらず聴衆は8分以上の入りを示し、音楽の国ドイツ、オーストリアへ乗りこむ学生オーケストラに暖い拍手が送られた。同日、旅行団とオーケストラの結団式がオーストリア大使ハートルマイアー氏をむかえて行なわれた。それから出発までの5日間は最後の練習と打ちあわせ、パンフレットの印刷、楽器の荷造りなどに費やされた。

§ 3. ヨーロッパでの東大オーケストラ

10月27日朝、整備の都合で10時間遅れて到着したスカンジナビア航空のチャーター機でいよいよヨーロッパへむけ出発した。総勢106名、うち演奏人員101名であった。西ドイツでは移動に使うバスや宿泊するホテルのことから演奏会場の世話まですべてDAAD（ドイツ学術交換奉仕会）の世話になった。

10月29日夜、ボンの郊外のゲミュントで最初の演奏会が行なわれた。ゲミュント市公会堂につめかけた聴衆を前に両国歌につづいてモーツァルトのディヴェルティ

メント17番、協奏交響曲、そしてイタリア交響曲を演奏、冷たく澄んだドイツの空に響きわたった。聴衆の反応はきわめて暖かく、途中の楽章でも盛大な拍手がわきおこり、最後の曲が終わった時には小さな公会堂がゴーストと鳴りひびくようなものすごい拍手と床を踏みならす音に包まれ、アンコールを3曲演奏するほどだった。はじめかたくなっていた部員も聴衆の暖い拍手を受けて熱のこもった演奏をし、まずは成功裡に第一夜の演奏を終えた。

こうして西ドイツで6回、オーストリアで2回の演奏会を開き、各地でのレセプション席上でも演奏し、その間をぬってオペラやコンサートに接することもできた。楽器はほとんど日本から持参したが、ティンパニー対とハープ、チェレスタは現地で借用し、ウィーンでは特にウィーン交響楽団のものを使用した。会場はどこも割合小さなホールだったが音響的にすぐれたホールも多く、中でもフィアゼンの会場は世界で7番目に音響が良いというところで、有名な音楽家もたびたび来演しているという。このフィアゼンでの演奏会は特に好評で、アンコールを6曲も演奏した。現地の新聞は「彼らは期待を裏切らず、ミカドの国から来訪して来た生気はつらつたる若き音楽家達に対する感動は、ただ大きかったのみでなく、尊敬の念さえよび起こした。」という書き出しで評を掲載した。各都市で大学の総長や市長主催の歓迎レセプションが行なわれ、そのすさまじいばかりのビール・ワイン責めは全くドイツ的だった。そのほか楽器を買った者もあった。

ヨーロッパでの20日間は夢のように過ぎさって11月16日夕刻羽田空港へ到着、未曾有の大事業だった訪欧演奏旅行はともかく成功をおさめて終了した。この演奏旅行で、その前2、3年ある程度に達したまま停滞していた演奏水準を一気に引き上げることに成功し、アマチュアとしてのほぼ極限にまで達し得たことは確かである。技術的なこともさることながら、音楽性について「演奏は驚嘆に値するものだった。それはむしろ音楽の内容がいかに表現されたかということ、技巧を越えた本質的なものについてである」(グラーツの新聞評より)といった具合に高い評価を受けたことは部員はじめ関係者にとって何よりの喜びであった。プログラムの点では冒険とも言える難曲ぞろいだったが、史上最高の練習量と本番の回数でこれを克服した。そしてこれを演奏したメンバーがハープの早川夫人、卒業生4名、職員2名を除いてすべて現役の学生からなっていたことも誇るに足ることがらである。(近年世界的に弦楽器奏者の不足が目立っているが大学のオーケストラも例外でなく、現在エキストラな

して演奏できる大学はごくわずかである。)部員の中から出した3人の独奏者も好評で「傑出した音楽家であるという以外に何も言うべきことはない」と評され、ドイツのオーケストラにさそわれたりした。以上演奏面での成功の原動力が早川正昭氏の指導であったことはもちろんで、7年余にわたる早川氏の努力はヨーロッパにおいて実を結んだのだった。

運営面では松田教授はじめ旅行本部、後援会の協力で困難な問題の解決にあたり、本来オーケストラとは縁のうすかった人々からも暖い協力が得られた。部内ではドイツ旅行という目標のもと全員がまとまるのが最大の課題とされ、一応達せられたが、途中特に夏の合宿でサークルとしてのオケの危機が叫ばれ、問題は後に持越された。これらは後の東大闘争の中で提起された問題点にもつながってゆく。

(なお、訪欧に参加しなかった部員は11月13日の駒場祭で日本女子大と合同演奏を行なった。)

§ 4. 帰国後のこと

昭和42年1月、帰朝報告を兼ねた第52回定期演奏会と国立大学音楽会を以ってドイツに明けドイツに暮れた一年は終わった。結局この年度の演奏会は大小とりまぜて30回にも及び、活動規模は質量ともに最大だった。

42年度は再び例年どおりの活動を行なった。メンバーが入れかわって(この年の新入生は40人以上にのぼった)訪欧当時ほどの実力はなくなったものの依然としてかなりの水準を維持し、特に演奏旅行(山陽・九州)では各地で今までになく評判がよかった。メイン・プロは「シェエラザード」で、このためにはじめて演奏旅行にハープを持って出かけたので楽器運びの苦労は大変だったが演奏効果は非常にあがり、ハープのはいったオーケストラをめったに聴く機会のない小都市などで特に喜ばれた。またこの年は五月祭のプログラムに序曲だけを追加して、余力を音楽教室にそそいだこともあって音楽教室はかなり充実したものになった。

つづいて駒場祭は前年夏の合宿で弦のトレーナーをした桐朋の指揮科助手岡部成子氏を指揮者にむかえてシューベルトの9番を演奏した。駒場の1、2年生中心でこのような大曲を演奏することについては当初不安の声もかなりきかれたが、結果的には岡部氏の桐朋システムによる厳しい指導が効を奏してかなり密度の高い演奏となった。

そして43年1月の定期演奏会では珍らしくフランスものばかりバロックから近代まで4曲をとりあげ、中でも原譜どおり混声合唱を加えた「ダフニスとクロエ」の演

奏は話題を集めた。この曲の管弦楽は4管の大編成に打楽器11人、ハープ2人を含むもので、一曲の出演者数は史上最高になった。

この演奏会が終わって訪欧当時の主力メンバーの大部分が卒業してオーケストラは大幅な世代交代を迎え、技術低下が少しずつ問題となってきた。外部環境を見るとこの定演のころは米空母エンタープライズ入港で騒然としていた時期であり、学内では1月末医学部の無期限ストがはじまった。東大は、そして東大オーケストラは激動の東大闘争の年を迎えようとしていた。

VI. 東大闘争の激動

1968年～69年の東大闘争は東大の存在と我国の大学制度を根底から揺るがせた大事件だったが、オーケストラもこの激動の中で大きな試練に直面した。はじめのうちは表面的には例年どおりの活動が続けられたが、闘争の全学化にともなうきびしさを増した状況の中で常任指揮者早川氏が突然辞任するという事件がおこり、オーケストラの本質、および音楽そのものが問われることとなった。以下、東大闘争の推移をおりまぜながらオーケストラの活動を追ってみることにする。

§ 1. 演奏旅行まで

医学部学生自治会が全学無期限ストライキにはいったのは68年1月29日のことだった。インターン闘争以来長い間くすぶりつづけていた研修医問題が深刻化したわけだったが、はじめのうちはまだ医学部だけの問題とされ全学的な関心をよばなかった。その後2月の春見医局長監禁事件、およびそれに伴う大量処分の発表、そして卒業式中止という事態に発展してようやくオーケストラ活動に影がなげかけられた。卒業式挙行のために大学当局は一時警官の導入をも示唆したが、結局式中を中止したため、オーケストラの演奏も自動的に流れた。(卒業式中を伝える「サンデー毎日」は「安田講堂ではこの朝、総長告示もワグナーの“ニュールンベルクの名歌手”前奏曲も聞かれなかった……」と報じている。) つづいて入学式も同様の混乱が予想されたため、入学式前日部内で討論が行なわれて入学式演奏の意義を考え、「演奏は新入生歓迎の意を示すものだから、新入生の大部分が参列しなかった場合や、機動隊が式を守ったり、混乱で楽器が危険な場合は演奏を自発的に中止する。」という点で意見の一致をみた。入学式は多少の混乱はあったが強行され、演奏も行なわれた。

その後五月祭での演奏は例年と同じように行なわれた

が、6月になって闘争はにわか全学化、かつ活発化して新たな局面をむかえた。まず6月15日医学部全学闘争委員会が第1次安田講堂占拠を行ない、バリケードを築いて約70名がたてこもったのに対し、17日未明大河内総長は「大学の中核機能をマヒさせる講堂占拠は容認できぬ」として機動隊1200人を導入して学生を排除した。この機動隊導入は全学に大きな衝撃を与え、大学自治に対する脅威として受けとられ、20日には法学部をのぞく9学部が一日ストを決行、同日安田講堂前で行なわれた抗議集会には6000人以上の学生が参加した。28日には総長会見が開かれたが学生の不信感をつのらせて終わり、7月2日全学共闘会議は大量団交と処分の白紙撤回を要求して安田講堂を再び占拠した。5日には文学部につづいて駒場の教養学部が無期限ストライキに突入り情勢は日に日に緊迫感を増していった。

こうした中でオーケストラの練習は一応平常どおり続けられた。しかし闘争の進展に伴って精神的・時間的に余裕のないまま練習にとりくむことになり、実際に練習をさぼる者も出はじめた。この東大闘争は従来のおゆる学生運動と異なって東大自身が問題となっていたために全学生にとって全く無関心でいることは不可能であった。そしてオーケストラでも「オーケストラと政治性」といった討論が行なわれ、政治問題をタブーとする雰囲気のあるオーケストラへの批判が出、やがてサークルとしての本質論にまで発展していった。このころ演奏旅行の準備はすでにほぼ完了してひき返せないところまできていたのと、演奏旅行が夏休み中であるために演奏旅行の実施についての討論は行なわれず、7月16日東北地方演奏旅行へ出発した。

§ 2. 早川氏の辞任

演奏旅行では演奏会を9回、音楽教室を5回開催し、特に音楽教室ではプロコフィエフの「ペーターと狼」をナレーションつきで演奏したのは新しい試みだった。これは難曲だったので消化不良のまま本番をむかえた感があったが中学生には好評だった。演奏会の方はベートーベンの7番と「展覧会の絵」という大変にスタミナを要するプログラムでかなり出来、不出来があったが、酒田・能代などではかなりの演奏を聞かせた。しかしこの旅行中のオーケストラの雰囲気は緊張感に欠け、中には観光旅行気分について来ているがごとき行動をとる者もいて、従来から問題にされていた演奏旅行のあり方が問題化しようとしていた。

最終日は弘前だった。音楽教室が終って演奏会場に移動し、ステージ・リハーサルを終えようとした時指揮台

の上の早川氏が「今まで長い間指揮をしてきましたが、常任指揮者として棒をふるのはこれで最後です。」と突然辞意を表明された。あと1回でこの旅行も終り、という気分だった部員たちにとってこの早川氏の辞任宣言はまさに青天の霹靂であり、大きな衝撃を与えた。一瞬放心状態になった部員たちに楽器係が終了後の指示をする声がうつろに響いた。

そして本番、演奏が始まるころになってやっと早川氏辞任の重大な意味のみこめてきた、という感じだった。演奏中みんなかってなかったほど緊張し、早川氏のタクトを見つめた。ペト7のあの難かしいリズムがいつになくピッタリと合った。休憩をはさんで「展示会の絵」、終曲の「キエフの大門」のコードが規則正しいチャイムの音とともに高潮してゆくにつれ必死で演奏する部員たちの胸にさまざまな思いが去来した。もうこれで最後、みんなの目に涙がにじんでいた。音楽はクレッシェンドを重ね、早川氏の指揮はますます熱を帯びて……ついに演奏は終わった。早川氏はいつもと同じようににこやかな表情であいさつをされ、「歌声ひびく野に山に」のタクトをとられた。いつもなら晴れやかな表情で楽しく演奏する「歌声ひびく」だがこの日ばかりはみんな涙をこらえ、あるいはハンカチでぬぐいながらの演奏だった。聴衆の拍手はアンコールが終ってもなお続いた。

続いて行なわれた打上げパーティーの席上で早川氏は「15年前初めて演奏旅行に来たこの弘前でバトン置くことになった。やめようと思ったのは仙台のペト7で振りまがいをしてからだ。私はプロとしての責任をとる。しかし君たちもよりよい音楽を追求する厳しさをもう一度考えてほしい。」と辞任の理由を述べ、鋭い問題提起をされた。パーティーはいつもと同じようににぎやかだったけれども、どこことなくしめっぽかった。

§ 3. 「新体制」をめぐる

いつまでも悲しんではいられない。その夜弘前市内の旅館へ帰ってからいくつものグループに分かれて討論が行なわれ、夜を徹した者も多かった。

東京へ帰ってから本格的にオケ活動の総点検と再建運動が始められた。3年生の執行部を中心とした集まりは夏休み中ほとんど連日のように行なわれ、討論はオーケストラの現状分析からサークルとしてのオケの本質論、学生の音楽団体のあり方にまで及び、従来の例年のスケジュールを無批判に実行してゆくやり方への批判が出された。早川氏の人間的・音楽的魅力に頼りきり、すっかりおぼさっていたオーケストラは、早川氏の辞任という大事件に遭遇して根底から動揺したのだった。この間部

員には膨大な量のアンケートが送られたり、討論会への呼び出しがあったり、また早川氏との会談も行なわれた。

夏休みの終りの合宿までに執行部の態度として次のような方針が出された。①従来のなれあいの運営を改め、指揮者に対するオケの責任を明確にする。②そのために各機関の権限を明確した新運営機構をつくり、合宿で正式に発足させる。③この新しい体制のもとで早川先生を客演指揮者をお願いして定期演奏会を行なう。

そして合宿では執行部の提出した「新体制」をめぐる激論がたたかわされた。特に2年生から、3年生の執行部の独走を阻止し、一種の直接民主主義を志向する対案が出され、オーケストラの責任体制や部員の主体性といった問題を中心に議論は深夜にまで及んだが、結局執行部の提案がほぼ原案どおり承認された。ここで生まれた新体制は①総会(最高決定機関)②運営委員会(総務・内務を中心とした運営実施機関)③演奏委員会(パトリダーからなり、演奏面に責任をもつ)④監査委員会(執行部の独走をチェックする)⑤評議委員会(以上の各委員会の代表と各学年から選ばれた委員によりオケの方針を協議する—この委員会が最も問題になった—)といった組織を備えたもので、合宿中に各学年から評議委員、監査委員が選出されて正式に発足した。

こうして定期演奏会、および駒場祭の曲の練習がはじめられた。定演の曲はこれまた激論の末、ここ数年懸案となっていたブラームスの4番に決まった。「悲願の曲」ブラ4にオーケストラの前途を賭け、新体制のもと前進が始まったのだった。しかし問題がすべて堀りおこされて解決されたわけではなかったために、東大闘争の拡大の過程の中で問題は再燃することになる。

§ 4. 闘争の拡大の中で

夏休み中も闘争をめぐる情勢は流動していた。大学側では長い協議のすえ、8月10日「告示」を発表し、紛争解決のための大学の「最終方針」を示し全学生に送付した。(いわゆる8・10告示) これに対し安田講堂を占拠中の全学共闘会議(=全共闘)は翌日告示による収拾を断固拒否する方針を発表、全学生に送った。大学側では当初夏休みが明けてセクトに無関係の「一般学生」が立ちあがって「告示」の線でスト解除することを期待したようで、各学部では9月はじめ告示の説明会を開いたりした。しかし休み明けのキャンパスのそこかしこで花開いた討論の輪の中で8・10告示を大学側の居直り、ごまかしてであるとして拒否する学生は増加していき、全共闘は多くの支持者を集めるようになった。こうして9月7日

の教養学部代議員大会のスト続行決議を先頭にして各学部は次々と無期限ストに突入、10月12日の法学部のストについて全学無期限ストライキという事態となった。この間建物の封鎖が広がる中で大学側は適切な対応をなし得ないまま11月はじめ大河内総長は辞任した。

オーケストラは例年では9月から10月半ばまでは試験で練習はしないが、この年はストで試験は延期されていた。もしストが終結した場合試験で練習が不足する、というわけで9月23日定期演奏会の練習を開始した。しかし刻々流動して10日先のことは予測できないという情勢の中では練習の計画をたてることはもとより、翌年1月に定演を行えるかを予測することも不可能だったため、定演の実施については11月中旬に決定することになった。オーケストラとしてはメンバーが闘争への主体的な参加と練習を両立できるよう最大限の努力をばらうこととし、毎週次の週練習を行なうことについて部員の承認を求めながら練習は続けられた。続いて問題になったのは10月初旬の駒場祭のための合宿だった。「この重大な時期に大学をはなれていてよいのか」「4、5日では大した情勢の変化はあるまい」「駒場祭自体行なわれるかどうかかわからない」などいろいろな意見が出されたが結局10月4日、闘争から時間的、場所的に全く離脱して合宿を行なうのはよくない、という意見が通って合宿は中止された。このため駒場祭の演奏も練習量の点から不可能になった。

11月にはいって加藤一郎教授を総長代行とする加藤執行部が登場、「話し合い路線」を打ち出して新しい局面をむかえた。しかしもはや東大闘争は単に処分撤回とか機動隊導入という個別的な問題でなく、広く大学のあり方、帝国大学以来社会の中で果してきた役割、さらに教育体制そのものを問題とするようになり、全国に火の手を広げた学園闘争の天王山とされるようになった。全共闘は全学バリエード封鎖を貫徹しようとし、日共系学生は外人部隊を入れてこれを阻止しようとし、大学側は両派の間にはいって全学集会を開いて解決への道をさぐるとしていた。内ゲバの頻発、そして大量留年と卒業延期の現実化、さらに入試中止が取沙汰されるに及んで東大闘争は大きな社会的関心を集め、新聞は毎日東大の様子を書きだした。

定期演奏会（69年1月19日に予定されていた）を行なうかが討議されたのはこうした状況の下においてであった。練習はずっと続けられていたが、9月ごろ見られたブラ4に対する熱意はかなり色あせていた。はじめのうちこそ念願のブラ4の重厚な響きに酔い、新体制のもとで非常な緊張をもって練習にとりくんだが、やはりブラ4

は難かしくだんだん進歩が見られなくなって壁につきあたり、ドイツ旅行後の技術的低下という問題も指摘された。定期演奏会についての討論はほぼ1ヶ月にわたっていろいろな形で行なわれ、主にスト中の定演の意義づけが焦点となった。全共闘支持と民青（日共系）支持、三年生の執行部と他の部員、音楽観の違い、さらに深刻な事態の下で音楽を奏するという一種の「うしろめたさ」、そういったさまざまな要素が直接・間接にからみあって討論は果てしなく続いたが、事務的準備のためには11月下旬までに最後決定を下すことが必要だった。11月17日の評議委員会に続き、21日は練習を早く切り上げて部員総会を開いて最終的な討論を行なった。「音楽を追求する者として定演はぜひやりたい。闘争と音楽は別次元のものだし時間的にも両立可能」「自立的なサークル活動は闘争を推進することと方向性において一致する」といった開催賛成の意見や、「この事態の中で演奏会を行なうのは社会責任上許されない。問題解決に専心すべきだ。」「1月19日頃の事態は全く予測がつかず、危険だ」という反対意見がたたかわされた末、夜11時になって採決、結果は賛成43、反対9、保留9で、スト中でも試験中でもともかくいかなる事態になっても定期演奏会を行なうことを決定した。

オーケストラのメンバーは闘争中、いつの時にもそうだったように、きわめてバラエティに富んでいた。10月には街頭闘争で部員3名が逮捕されるという事件もあった。（10・8米軍タンク車阻止闘争、於新宿。オケ内でもカンパや差入れ活動が行なわれた。）封鎖中の駒場第八本館から練習に通う者、封鎖阻止のために練習を休む者もいたし、オケの事務に追われて闘争について考えるひまもなかった者、闘争には参加せずもっぱら音楽に身をささげた者、さらに闘争のために遂にはオケを去った者もいた。スト中、オケの部室はいつものようににぎわっていたし練習もずっと続けられども、毎日情勢がゆれ動いて事態は深刻化し、それがマスコミに報道されるという異常な状況でのオケ活動は常に不安に追いかけていた。

§ 5. 定期演奏会決行

12月初め、加藤総長代行は「新提案」を全学に示し、学生の間では「全学集会」をめぐる対立、内ゲバが激化するうちに文部省も対策にのり出し、入試中止や大学閉鎖が検討されるに至って東大闘争は社会問題化していった。結局全学集会（大衆団交）は行なわれぬままに12月も末になり、27日の坂田文相と加藤代行の会談で44年度の入試中止が決定した。そして大晦日、全共闘の時計台

放送局からベートーベンの第9が流れて昭和43年は暮れていった。

44年1月、一部のノンセクト学生と日共系によって選出された7学部の代表団と大学側との全学集会を10日にひかえて緊張する中で、オーケストラは6日から練習を始めた。9日もいつものように練習を始めたが、日共系・全共闘双方の部隊が続々構内に集まり、練習場のある建物は日共系外人部隊の占拠するところとなって情勢不穏になったために練習を途中で中止し、楽器を運び出した。この夜経済学部で乱闘があり、機動隊が導入された。翌10日には秩父宮ラグビー場で7学部代表団との全学集会が機動隊5000の包囲の中で開かれ、同日夜「確認書」がとりかわされた。なおこの日集会粉碎のデモに加わっていた部員1名が逮捕され、13日間拘留されたために定期演奏会に出演できなくなった。

11日から各学部で無期限スト解除がすすめられて全共闘は主導権を失ない、安田講堂への機動隊導入が必至になる中で、執行部はあくまでも19日の定演実施にむけて奔走した。練習はもう学内では行えなくなって渋谷のカワイ楽器で行かない、終わると楽器は車で持ち帰るといふ非常態勢でのぞんだ。この期に及んで演奏会をやる意義がどこにあるのか、という疑問の声もきかれたが、事態はもう引き返せないところまできていた。ここで演奏会を中止すればオーケストラは一挙に崩壊することは明きらかだったし、ともかく音楽をつくりあげなければならぬ、という音楽家としての「意地」が部員を支えていたのかもしれない。

18日、本郷構内に機動隊8500が導入され、安田講堂や法文1号館などの封鎖解除が始まり、この様子はテレビで実況中継されて東大は全国の耳目を集めた。その夜のゲネプロのあい間にも部員たちはラジオのニュースに耳を傾けていた。

19日、いよいよ定期演奏会当日になった。安田講堂への機動隊の攻撃は朝から再開されていた。恒例の「歌声ひびく野に山に」の合唱とアンコールの演奏はこのあまりにきびしい状況にそぐわないので中止することとした。リハーサルも終わった午後5時46分、安田講堂はついに機動隊の制圧するところとなり、本番前の部員の胸は全共闘支持か否かを問わず複雑な思いに満たされた。そして6時半、8割5分以上はいった聴衆を前にして54回定演が開演した。後にこの演奏会のことを報じた新聞記事の言葉を借りれば「ガスと水と石で廃虚になった安田講堂とは“魔笛”でへだてられた夢のように優雅な別世界」だった（毎日新聞2月14日朝刊より）。東大の存続すらわからなかった当時の状況の中で、もうこれが東

大オーケストラの最後の演奏会になるかもしれない、とだれもが思った。演奏はそれ自体かなりの出来だったが部員の心に宿る不安感はおおむねもなく、曲が難かしくなかったせいもあって音楽を充分に歌う余裕はあまりなかった。ブラームスの4番の悲劇的な情熱をこめたフィナーレが終わって拍手、最後に総務の南条洋雄氏がステージからあいさつして演奏会は終了した。

こうして、戦時中以来最大とも思われる困難の中で定期演奏会を「決行」したオーケストラは、新たにたなるオーケストラ活動を摸索しつつ混迷の時代をむかえることとなる。

VII. 摸索する現代

§ 1. 新たにたなるオーケストラを求めて

定演は終わったもののそれから先の見通しは全くなかった。定演の翌日、一時復活するかと思われた44年度入学試験は正式に中止と決まり、新入生がはい望みはなくなった。大学の将来も暗然としていて、入試中止が一年ですむかどうかもわからず、大学院大学への再編も取沙汰される中でオーケストラはどのような活動をすべきかは見当もつかなかった。

例年2～3月は練習はしないが、この年は6月初旬まで139日間にわたって練習のない日が続き、この間4回の部員総会や3日間の「討論合宿」が開かれて、オーケストラのつくる音楽とは何か、学生のオーケストラとは何か、われわれにとって演奏会とは何か、といった問題が果てしなく討論された。新総務に就任した岩佐泉氏（42年度入学）は特に「スケジュール的にすべてが動く今までのオーケストラは形骸化している。これを克服する前提として部員の意識の不統一、断絶を認めあった上で活動しなければならない。」と主張し、慣例に従ってスケジュールを決めて実施してゆく「官僚的執行部」となることを拒否し、オーケストラの練習を中止したのだった。オーケストラに絶望し、あるいは懐疑的になって去って行く者も何人もあった反面、ともかく楽器を鳴らそうと有志で弦楽合奏をしたこともあった。この間大学は「正常化」への道を歩んでいた。3月までに文・医をのぞく各学部で形の上では授業が再開され、新入生ははいらないまま4年生は卒業して部員数はかなり減った。例年なら新入生をむかえて活気あふれる駒場の春だが、この年は授業が再開されても登校する者は少なく、キャンパスは閑散としていた。

5月初旬には討論合宿が行なわれ、延べ10時間以上に

わかって討論をした。楽器を鳴らさないオーケストラは無意味だ、オケの変革は練習を通じて行なわれるべきだ、とする「練習再開派」と、練習を再開して日常性に埋没してはオケの根本的問題は解決しない、とする「非再開派」との間の議論はなかなか合わなかった。しかし5月16日、再び開かれた総会で、演奏会を前提としない練習を始めるという提案が可決された。そして6月9日、5ヶ月ぶりに学生ホールで練習が再開され、再開に反対していた岩佐氏は総務を辞してオーケストラを去っていった。以後主に早川正昭氏の指揮でハイドンの104番とシューマンの1番を7月下旬まで13回にわたって練習し、最後にテープにとって反省会と総会を行なった。この総会で「われわれにとって演奏会とは何問うかわりに、われわれはどんな演奏会ができるかと問うてやってみる方が創造的ではないか」（55回定期プログラムより）という新総務からの提案が可決され、新たな演奏会活動を指向しつつオーケストラは再び歩みはじめた。

この結果行なわれたのが昭和45年1月の第55回定期演奏会であり、これは実に1年ぶりのステージとなった。部員も減って卒業生9人、エキストラ8人をむかえての苦しい演奏会だった。演奏技術の低下は著るしく、再生への道の遠いことを思わせた。こうした中でピアノ独奏の小林仁氏の精魂こめた演奏は部員に、また聴衆に大きな感銘を与えた。

§ 2. 東大オーケストラ1970

昭和45年2月、常任指揮者に新しく小林研一郎氏をむかえてオーケストラはまたひとつの転機をむかえた。小林氏は将来を嘱望されている若手指揮者であり、その新鮮な指揮ぶりは部員にとって大きな魅力だった。

4月、2年ぶりに多数の新入生をむかえてオーケストラは久しぶりに活気づいた。5月祭は室内楽のみで終わり、7月にサマー・コンサートを開き、つづいて伊豆大島で音楽教室を行なった。サマー・コンサートではベートーベンの第5とともに小林氏の意向でストラヴィンス

キーとジョリヴェの現代曲2曲が演奏され、特にジョリヴェの「トランペット、弦楽、ピアノのための小協奏曲」は本邦初演で、作曲者からアマチュア音楽をたたえるメッセージがよせられた。音楽教室は例年の演奏旅行と異ってほとんど部員の自己負担で費用がまかなわれた点新しい試みだった。この音楽教室の際、指揮者の小林氏が急に発熱して行かれなくなるという事件が起こり、急拠学生指揮者が代役に立って何とか予定を消化したわけだが、これをきっかけとしてアマチュアに不慣れた小林氏の指揮の問題点が指摘され、それ以前からあったわかまりが表面化した。東京へ帰ってから小林氏と相談した結果、氏自身も多忙で落着いて指導できないこともあって結局常任からひとまず退くこととなった。

8月の合宿でベートーベン第9の交響曲の練習が始まった。弦トレーナー玉置勝彦氏（ヴィオラ奏者）管トレーナー今井順夫氏（トロンボーン奏者）の2人の指導のもと、50年目にしてはじめて登場する第9交響曲にむけての前進が開始されたわけである。一学年ぬけて技術的にも低下した状況で第9をとりあげるのは大きな冒険ではあるが、この第9を新たななる50年の開幕を告げる第9とすべく奮闘しているのが現在のオーケストラである。

音楽部の歩んできた50年は、昭和20年の終戦の年を境にして戦前25年、戦後25年にわかれる。この間日本は戦争への道を歩み、敗戦のあとは戦後の混乱の中からやがて経済大国にまでのしあがるという激動を経てきたわけだが、この時代の波にもまれて音楽部も今までに述べたように多くの困難の中を歩んできた。昭和30年代の後半めざましい進歩をとげたオーケストラも東大闘争以後またひとつの困難に直面し、その中で新しい道を摸索している。闘争中提起された問題は依然として解決されていないが、新たななるオーケストラ活動とより高い音楽への摸索はこれからも絶えることなく続いてゆくことだろう。（飯塚 利昭）